第八

文部省著作

高等小學讀本

二

發賣所 株式會社國定教科書共同販賣所

K14
Mo

国立国語研究所
72429
図書館

文部省著作

高等小學讀本

二



發賣所 株式會社 國定教科書共同販賣所

目錄

第一課　秋の野山……一
第二課　種子の散布……三
第三課　イチョー……九
第四課　阿倍仲麻呂……十一
第五課　助船……十四
第六課　海ノ話……二十
第七課　浦島子……二十五
第八課　紫式部……二十九
第九課　稅所敦子……三十一
第十課　名古屋城……三十六
第十一課　わが陸軍……三十九
第十二課　聯隊旗……四十六
第十三課　廢物利用……四十七
第十四課　製紙……五十二
第十五課　源爲朝……五十八
第十六課　一谷の戰(一)……六十一
第十七課　一谷の戰(二)……六十四
第十八課　アイヌ……六十九
第十九課　二人の旅人と熊……七十四
第二十課　笠置落……七十七

菊殘

第一課　秋の野山。

殘れる暑さ、やうやく、去りて、吹く風涼しきころとなれり。かきねのあさがほの花、もはや、さかぬよーになりて、菊の花、美しく、さきいでたり。

一年のうち、暑からず、寒からずして、ここちよきは春と秋とにして、秋のうち、ことに、ここちよきはこのごろなり。されば、つねの日には、よく、勉めて、たる日曜日などには、思のままに、遊ぶべし。たんぼの稻の、いちめんに、黃金（こがね）色になりて、風吹くごとに、黃金の波のうつはての

落

ごろなり。いなぼをつ
この音に、おどろかされて、ぱっと、とびたつ
ろなり。道のべのすすきの風になびくも、
菊のかげを水にうつすも、また、このごろ
次に、山に、遊ぶべし。やまがら、ひわ、ほほじろなどの、
さへづりながら、枝より枝へ、とびまはるはこのごろなり。栗（くり）のみの、はらはらと、落ち、まつだけなどの、こなたかなたに、おひいづるもこのごろなり。谷間のもみぢの色づきはじむるも、また、このごろなり。

あー。かく、野に、山に、樂のみちみちたるはこのごろなり。されば、つねの日には、よく、勉めて、晴れたる日曜日などには、野に、山に、遊ぶべし。やがて、菊の花の色もかはりて、霜(しも)降り、雪降るころにいたらば、遊ぶをりも少かるべし。

第二課　種子の散布(さんぷ)。

果實

植物に、果實がなるのは、その同類(どーるい)をふやすためで、その果實、または、果實の中にある種子が、じゅくして、じめんなどに、落ちると、その種子から、しぜんに、芽(め)が出て、根が出て、しまひには、一つの、まんぞくな植

物になるのである。

しかし、植物には、たいてい、一本の木、一本の草に、數限のないほど、果實がなるものであるから、それが、みんな、その下に、落ちたとひ、そのたなら、たとひ、えたとしても、じゅーぶんに、日にあたるまず、また、清い空氣を吸ふことができないで、とーてい、まんぞくな植物になることができないものである。

それで、植物には、その種子が、方方に、散布されるために、それぞれ、しぜんに、つごーのよい方法がそな

熟　甘

はってをる。

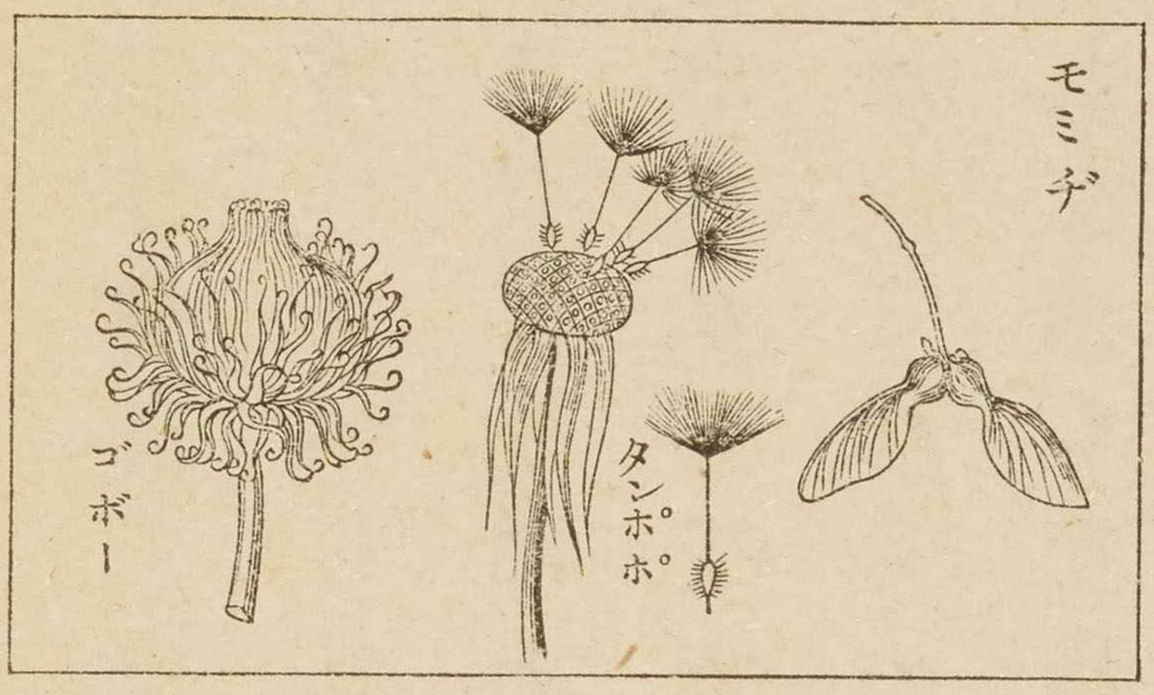
柿、梨、林檎などの果實は、熟すると、多くは、人や、他の動物にたべられる。そして、その種子は、おもに、のみこまれて、ふんにまじり、または、果肉といっしょに、散布される。

いったい、これらの果實は、熟しないうちは、色も青く、味もしぶくて、熟すると、色も美しく、味も甘くなるものであるが、その色の青く、味のしぶいのが、しぜんに、人や、他の動物にたべられるのをふせぐことになり、その色の美しく、味の甘いのが、しぜんに、人

生

や、他の動物にたべられることになるといふのは、まことに、おもしろいことではないか。

また、もみぢ、松などの果實は、ちょーど羽をひろげたよーに、できてをり、たんぽぽ、あざみなどの果實には、毛のよーなものがついてをる。それで、風が吹くと、たやすく、方方へ、とんで行く。もみぢやたんぽぽなどの、ときどき、生えてをるのを見るのは、まったく、このためで

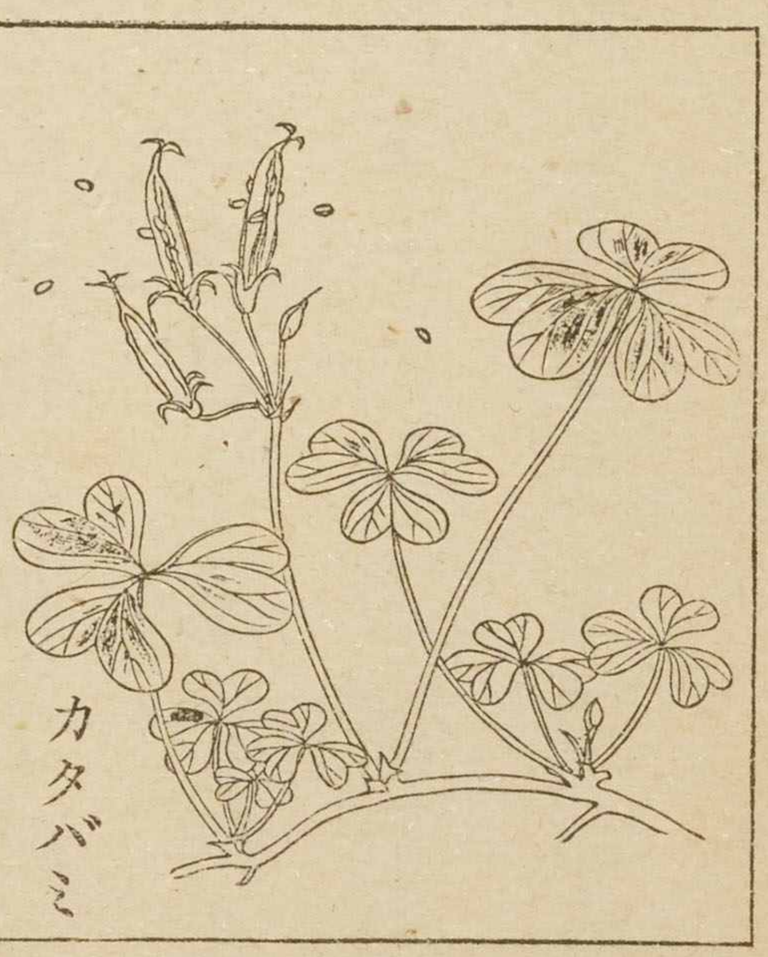


ある。

また、ごぼー、やぶじらみ、みづひきなどの種子には、毛やとげのよーなものがついてをる。それで、人の着物や、他の動物のからだなどについて、しぜんに、方方に、散布（さんぷ）される。それから、また、水中に、生えてをる植物の種子は、たいてい、水に流されて、方方に、散布（さんぷ）される。水中に、生えてをる植物の種子は、たとえてをらないものでも、海岸に、生えてをる椰子樹（やしじゅ）などは、その果實が、波に運ばれて、千里二千里の、遠い所の岸に、生えることがある。

高讀二

以上は、植物の種子が、動物と
か、風とか、水とかの力によって
散布されることをいったのであ
あるが、まだ、このほかに、じぶ
んの力で、種子を散布するもの
類のもある。すなはち、ほーせんか、かたばみ、その他、豆
のなどは、實が熟すると、さやがはじけて、その
けるる勢で、中の種子を、四方に、散布する。
へいぜい、きづかないことでも、しらべてみると、な
かなか、おもしろいことのあるものである。



カタバミ

第三課　イチョー。

イチョー（木）ハ、ワガ國ト、支那（シナ）ノ一部トニノ産スル喬（キョー）木ニ、上方ヘ向ヘリ。枝ハムラガリ出デテ、ソノサキ、冬、葉ノ落チタル時、遠方ヨリ見レバ、アタカモ、クサバウキヲ、サカサマニ、立テタルガゴトクニシテ、ソノ様、他ノ木トナリ。マタ、コノ木ハ、ソノサキ、多ク、北方ヘ向ヘリ。コレ、夏、コノ木ノ成長盛ナル時ニ、南風ノ、強ク、吹クトキアテラレテ、カク、曲レル

面兩

コノ木ニハ、雄木ト雌木トアリ。雌木ニ
ノル。コノ果實ヲ銀杏（ギンナン）トイフ。果肉ハ臭氣（シュー）アレドモ、
種子ハ、ウマクシテ、食スベシ。
コノ木ノ葉ハアフギナリニシテ、
葉ノ兩面ニ、多クノ、タテノスヂアリ。秋ノ末ニナレバ、ミナ、黃色トナ



乳

リテ、ハナハダ、美シ。

コノ木ハ、昔ヨリ、多ク、神社、佛閣（ブツカク）ノ境内（ケイダイ）ニ、植ヱタリ。

中ニモ、鎌倉（カマクラ）ノ鶴岡八幡宮（ツルガヲカハチマングー）ノ社前ニアルモノハ、コトニ、名高シ。

コノ木ノ、年ヲヘタルモノハ、幹（ミキ）ノ、高キ所、マタハ、枝ノ下部ヨリ、フトキ根ノゴトキモノ生ジテ、マッスグニ、タレ、アタカモ、乳房（チブサ）ノゴトキ様ヲナスコトアリ。

世（ヨ）ニ、コレヲイチョーノ乳トイフ。

第四課　阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）。

昔、わが國と支那（しな）との交通盛なりしころは、しばし

使者

ば、學識（がくしき）あるものをえらび、留學生として、支那（しな）につかはしたりき。阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）はその留學生の一人なりし。

仲麻呂（なかまろ）の留學生としてきたりしは、十六歳のときなりしが、もとより、博識（はくしき）、多才（たさい）の人なりければ、この頃の支那（しな）の皇帝、大いに、これを愛し、しだいに、高官にすすめたり。

仲麻呂（なかまろ）、支那にあること五十年、かく、しばしども、つねに、日本のことのみ思ひつづけゐたり。ある年、日本の使者、支那（しな）に、いたり

任　弔

しかば、仲麻呂、大いに、喜びて、ともに、その船に乗りて、歸らんとせり。

たまたま、海上にて、大風吹き出で、船はただよひて、あんなんといふ國に着きたり。支那の人人は、仲麻呂を死にたることと思ひて、詩を作りて、弔ふものもありき。しかるに、仲麻呂は、その後、ふたたび、支那にいたりしかば、人人、その無事なりしを見て、大いに、喜びたり。皇帝も、また、大いに、喜びて、もとのごとく、高官に任じたり。かくて、仲麻呂は、七十歳のとき、つひに、支那にて、死にたり。

位

そもそも、昔の船は、そのくみたて堅固ならざりしかば、使者、または、留學生の、支那に、往復するときには、つねに、朝廷にて、神をまつりて、無事をいのり、船に位をさづけなどしたまひたり。されど、ややもすれば、離島に、吹き流され、または、波風に、くだかれて、死ぬるものもありき。仲麻呂は、さいはひに、命は助りしかども、なほ、日本に、歸るをえずして、やみたり。その遺憾思ひやるべきなり。

第五課　助船。

箇　　浮

あらしが日本海の海岸をあれてゐる。一そーの船が、あらい波の中を、浮いたり、沈んだりしてゐる。助船の用意は、おほかた、できた。しかし、こぎてが、まだ、一人、たらない。

濱吉（はまきち）は、りょーしの子で、この村中でのこぎてである。濱吉（はまきち）は、これを見て、「そのなかまにはいらう」。と思って、そばに、立ってゐる母にむかって、

「おかあさん。私をやってください」。

といった。

濱吉（はまきち）の母は、六箇月前から、たより少い身になってゐ

る。夫は、ことしの春、小さな船に乗って、沖に、出たが、その夜、にはかに、吹き出した大風このかた、いまに、歸って來ないのである。それで、母は、いまは、ただ、濱吉一人を杖とも、柱とも思ってゐる。それだから、そんな、命がけの仕事には、どうしても、やる氣にはなれないのである。

しかし、母は顔を上げて、沖の船を見た。そして、「あの船には、人が、おほぜい、乘ってゐる。その人たちには、めいめい、妻もあらう、子もあらう。今、濱吉をやらないとすると、助船を出すことができないだらう。でき

考案

ないとすると、その妻や子は、また、じぶんたちのよーな、ふしあはせな身の上になるだらう。」と考へた。そこで、母は思ひきって、きっぱりとした聲で、

「濱吉（はまきち）行け。行け。早く、行って、あの船の人たちを助けてあげよ。」

といって、袂で、顔をおほって、うちにかけこんだ。そして、その夜は、夫のことを思ひ出したり、子のことを案じたりして、まんじりともしなかった。

夜が明けて、あらしはやんだ。沖の船は沈んでしまったが、助船の働で、乘ってゐた人人は、みな、助船

居

では、濱吉（はまきち）が、いちばん、めざましい働をしたといふことである。

濱吉（はまきち）の母は、いま、一人の村の人と、話をしてゐる。村の人は、濱吉（はまきち）のめざましい働をしたことについて、しきりに、ほめて、話してゐたが、「濱吉（はまきち）はどうしたのでせう。いまに、歸ってきませんが。」といふ問にこたへて、

「濱吉（はまきち）さんは、おっつけ、歸ってきませう。さっき、濱（はま）べで、村の人たちと、話をしてゐましたが、『早く、おしらせしよう。』とおもって、

危

来たのです。まー。お聞きなさい。めづらしいことがあります。

ゆうべ、濱吉（はまきち）さんたちがたすけた人のりょーしが居ました。その人は、六箇月ばかり前、沖で、あらしにあって、すでに、危かったところを、外國船に助けてもらひました。けれども、その船は、外國へ、行く途中でしたから、そのまま、外國へ、行きましたが、こんど、日本に、來る便船（びんせん）があったから、それで、こっちへ、歸って來ました。そして、なつかしい、じぶんの村が見え出したころ、にはかに、ゆうべの

表面

風が吹き出しましたので、『こんどこそ、死ぬるか。』と思ってねたさうです。濱吉さんたちは、そこへ、助けに、行ったのです。」

村の人が、かう、話をしてゐるうちに、一人の、やつれたりょーしが、濱吉（はまきち）や、ほかの村の人人といっしょに、はいって来た。母は「あっ。」とさけんで、そのうでにすがりついた。

第六課　海ノ話。

海ハ、地球ノ表面ノ大部分ヲシメテ（セキ）ヰテ、陸地ノ面（メン）積ノ三倍ホドアル。マタ、ドコマデモ、ツヅイテヰテ、

高讀二

淺　底

陸地ノヨーニ、ハナレバナレニハナッテヰナイ。

海ハ、タイテイ、海岸ニ近イ所ハ、ワリアト浅クテ、海岸ヲ遠ザカルニツレテ、ダンダン、深クナルモノデアルガ、オヨソ、六百六十尺ノ深サノ所ニナルト、キューニ、深クナルモノデアル。

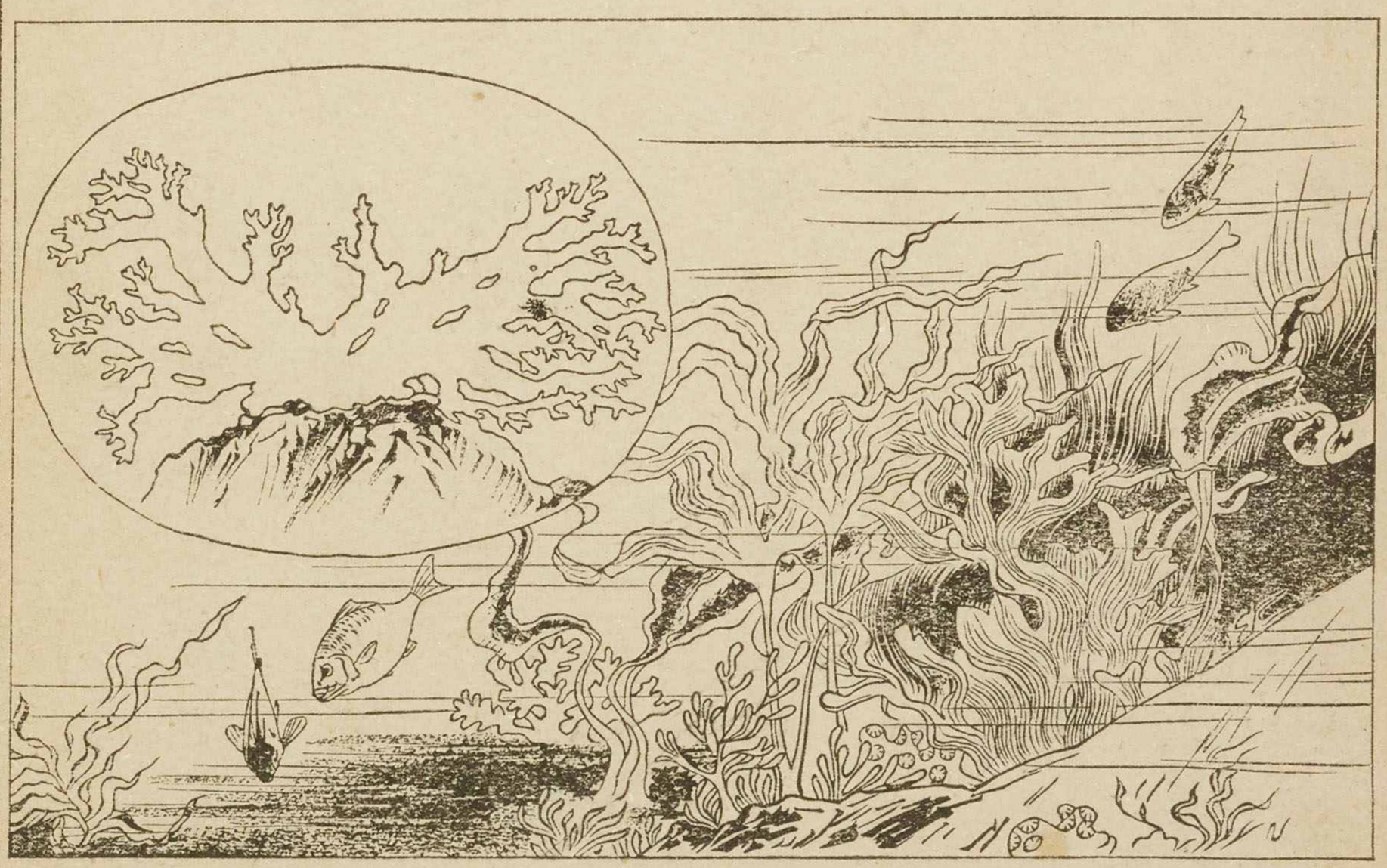
六百六十尺ヨリ淺イ海ノ底ハ、砂ヤ小石ヤドロナドデ、デキテヰテ、イロイロノ貝ガハヒマハリ、ワカメ、コンブナドノ海藻（カイソー）ガオヒシゲッテヰルノデアル。マタ、所ニヨッテハ、珊瑚（サンゴ）ガ、美シク、枝ヲツラネテヰル。六百六十尺ヨリ深イ海ノ底ハ、ゴク、小サナ動物ノカラヤ、赤

積ノ三倍ホドアルマ

低

イ粘土（ネバツチ）ナドデ、デキテヰテ、砂ヤ小石ハ、少シモ、ナクモ居ナイシ、海藻（カイソウ）モ生エテヰナイ。マタ、高低ガ、タイシテ、少クテ、二三箇所ヲノゾイテハ、ホトンド、平ダトイッテヨイホドデアル。

海ノ水ハ塩分（エンブン）ヲフクンデヰル。シカシ、ソノ塩分（エンブン）ノ量（リョー）ハ、所ニヨッテ、チガッテヰテ、

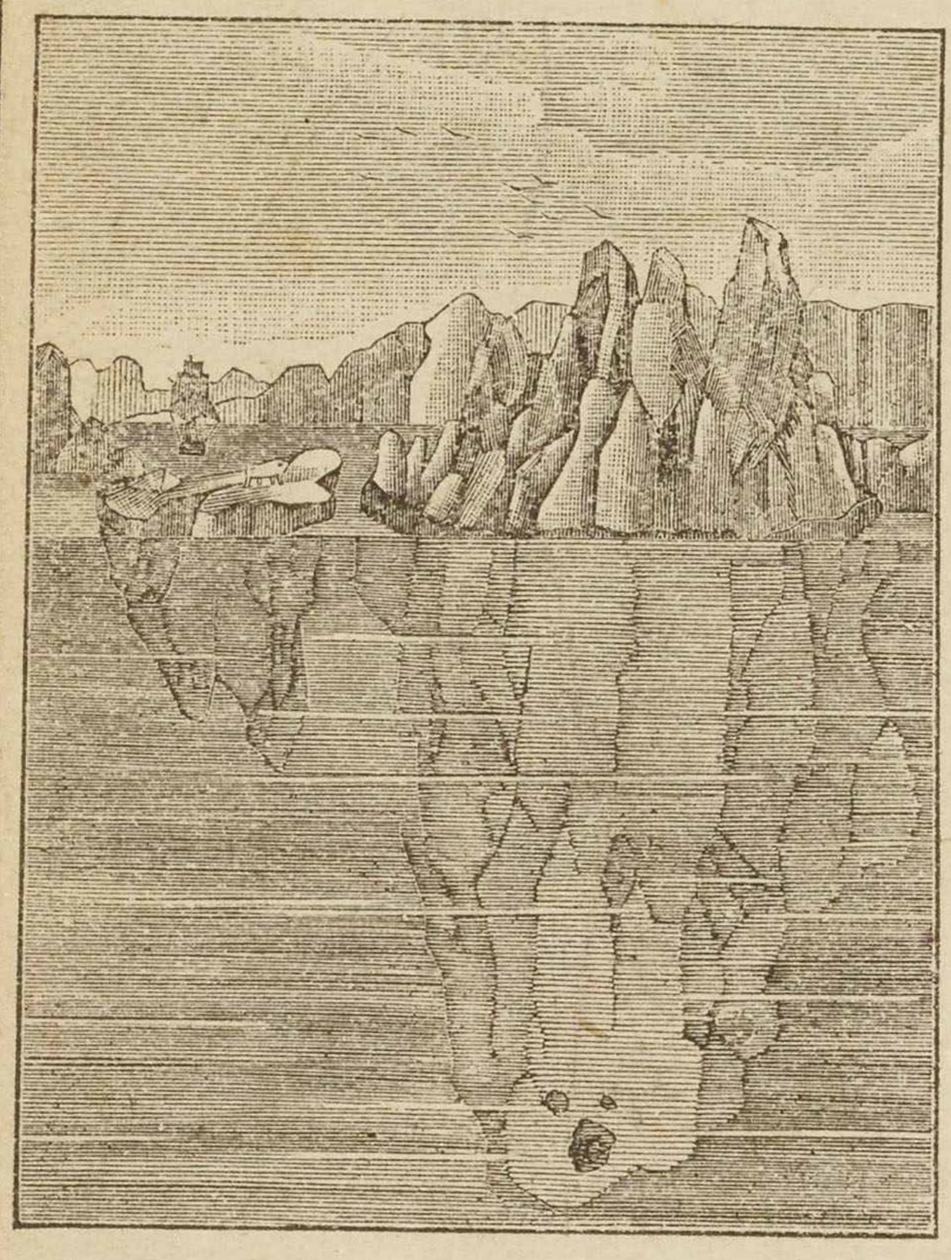


放

ワガ國デモ、瀬戸内海ナドノ水ハ、タイソー、塩分ニ富ンデヰル。マタ、海ノ水ハ藍色ヲシテヰル。シカシ、所ニヨッテハ、ホカノモノマジルタメニ、ソノ色ガ、イチジルシク、カハッテヰテ、支那ノ黄海ハ、黄河トイフ川カラ、黄色ナ土ヲ流シコムタメニ、キイロクナッテヰルシ、アジヤトアフリカトノ間ニアル紅海ハ、ゴク小サナ動物ガ浮ンデヰルタメニ、赤クナッテヰル。コノホカ、夜光虫ナドノ光ヲ放ッタメニ、夜、海ノ水ノ光ル所モアル。

マタ、海ノ水ハ、ソノ下部ハ、ドコデモ、イチヨーニ、ツ

氷



メタイモノデアルガ、ソノ表面ハ、陸地ノヨーニ、所ニヨッテ、温度ガチガフモノデアル。地球ノ、ズット北カ、ズット南カデハ、海ガ、一面ニ、コホッテ丼テ、ソノアツサ、六七尺ニオヨブモノガアル。マタ、氷山（ヒョーザン）トイフ、山ノヨーナ、氷ノカタマリガ浮イテ丼テ、ソノ直徑（チョッケイ）ノ、二里ニ達スルモノモアル。

海ノ水ノ中ニハ鯨（クヂラ）、オットセイ、ラッコナドトイフ海（カイ）獣（ジュー）ヤ、鯛（タヒ）、鰹（カツヲ）、鰊（ニシン）、ソノホカ、イ

高讀二

共有

ロイロノ魚類ガスンデヰテ、ワレワレハ、コレヲ、銃ヤ釣針ヤ網ナドヲ用ヒテ、トル。マタ、珊瑚ナドハ、潜水器ヲ用ヒテ、トル。マタ、貝モ、海藻モトリ、海ノ水カラハ、塩モトル。ジツニ、海ハ、共有ノ寶藏トイフベキモノデアル。

第七課　浦島子。

春の日かげののどかにて、
波しづかなるよさの海。
海上、遠く、船出して、
島子のつりをなせるとき、

波の中より、一匹の
大亀出でしが、たちまちに、
化して、をとめとなりにけり。」
をとめ、しづかに、いへるよー、
「われ、今、君をみちびきて、
蓬萊宮に、いたるべし。
いざ。いざ。早う。」と。
島子は、あとに、従ひて、
行くや、千尋の海の底。
五百重へ波をかきわけて、

蓬萊宮にいたりけり。」

高讀二

蓬萊宮（ほーらいきゅー）にいたりけり。」

あやの衣を身にかさね、

あまたのものにかしづかれ、

玉のうてなに、浦島子（うらしま）、

長き月日を送りしが、

おのが故郷（きょー）のなにとなく、

こひしきままに、「いま一度、

歸らんもの。」と、そのよしを、

をとめに、いへば、泣く泣くも、

また、あふまでのしるしにと、

高讀二

五百重の波をかきわけて、

取りて渡せり。玉手箱」。

島子、故郷に、歸り来て、

見れども、おのが家見えず、

さがせど、おのが父母あらず。

せんかたなくて、その箱の

ふたをあくれば、あやしやな、

白雲中より、たちのぼり、

かなたに、なびくと、見るうちに、

若きすがたは消えうせて、

しらがの翁となりにけり。」

幼不幸

第八課　紫式部

紫式部は藤原爲時のむすめなり。幼きころより、ものおぼえよくて、兄のきて、よく、記憶したり。されば、爲時大いにこれを愛し、つねに、その頭をなでて、「なんぢの男子ならざるが残念なり。」といひたりとぞ。

式部は、藤原宣孝に、嫁ぎたりしが、不幸にも、早く、夫に、わかれたれば、それよりは、ただ、二人のむすめをそだつることと、書を讀み、文章を書くこととのみを樂となしゐたり。

好著賞

このころ、一條天皇の中宮に、上東門院と申す御方おはしけり。はなはだ、學問を好みたまひ、學問に、すぐれたるものをえらびて、めしたまひけるが、式部の才學あることを聞きたまひて、また、これをめしたまひき。式部ずなはち、つかへまつりて、漢籍などを教へまゐらせたり。

式部の著したる書に、源氏物語といふものあり。五十四帖に分れたる大作にして、そのすぢもおもしろく、文章も、はなはだ、たくみなれば、天皇これを見たまひて、「學識あるものの作なり。」とて、大いに、賞し

たまひき。この書は、今にいたるまで、文章の模範と
して、多くの學者に愛讀せらる。
式部は、かく、非常の名譽をえたれども、少しも、たか
ぶることなく、ますます、學問をはげみ、まことの行をつつしみたり。
式部が、二人のむすめは、姉を大貳三位といひ、妹を
辨局といふ。母ににて、才學すぐれたりしかば、いづ
れも、えらばれて、宮中に、つかへまつりたり。

第九課　税所敦子

税所敦子は京都の人なり。幼き時より、學問を好み、

孝養

産

ことに、文章（ぶんしょー）、和歌（わか）にすぐれたり。後、そ
居りし、鹿兒島（かごしま）の藩士（はんし）、祝所（さいしょ）篤之（あつゆき）と
りしが、不幸にして、早く、夫に、わかれたり。その
たりしが、その子は、生れて、まもなく、死に、殘れる長
子もおもき天然痘（てんねんとー）にて、
敦子（あつこ）は、かく、かさねがさねの不幸にあひたれども、
もとより、をしきうまれつきなりければ、心を定
めて、夫の故鄕（きょーきょー）なる鹿兒島（かごしま）へ、下りたり。そこには、な
ほ、姑（しうとめ）のありければ、それにつかへて、孝養をつくさ

才徳

んとてなり。

さて、そのころは、いまだ、汽車、汽船などの便利もあらざりければ、敦子は、種種の難儀にあひ、長き日數をへて、やうやう、鹿兒島に、いたりたり。しかるに、姑は、いまだ、敦子の人となりを知らざりしことととて、はじめは、敦子に、はなはだ、つらくあたりたり。されど、敦子は、ただ一心に、孝養をつくしければ、まもなく、姑は、敦子を信じて、このうへもなきものと思ふにいたれり。

かくて、ありけるほどに、藩主、島津齊彬、敦子の才徳

孝養

ほ姑のありけれはそれにつかへて孝養をつくさ

のすぐれたることを聞きて、あとつぎのしに、あげたり。敦子は、日夜、心をつくして、もるが、不幸にして、そのあとつぎ、早く、世を去りたり。敦子は、非常に、なげき悲みけれども、せんかたなかりければ、家に、歸りて、もとのごとく、姑につかへたり。

その後、齊彬の弟、久光、その娘をもとめたり。この時、敦子は、また、えらばれて、侍女となりて、近衞家に入りたり。

後、明治八年、皇后陛下の、女子の、才學すぐれたるも

文章

古

後、明治八年、皇后陛下の、女子の、才學すぐれたるものをめしたまひしとき、敦子も、また、あげられて、宮中の女官となりたり。

敦子は、宮中に、ありては、おもに、文學のことに、あづかり、文章、和歌などにつきて、人の問に答へ、また、みづからも、ますます、學問をはげみたり。その歌集に、御垣の下草といふものあり。すぐれたる歌、はなはだ、多し。

敦子は、かく、才學もすぐれ、その婦德も高かりければ、人人「古の紫式部に、よくも、にたるかな。」といひあ

ひたりといふ。

第十課　名古屋城。

東海道鐵道ノ汽車ニ乘リテ、名古屋ヲスグレバ、ハルカニ、天守閣ノ、空ニ、高ク、ソビユルヲ見ルベシ。コレ、スナハチ、名高キ名古屋城ハ、名古屋市ノ北部ニ、アリ。昔、徳川家康ノ諸大名ニ命ジテキヅカシメ、ソノ子、義直ノ居城トシタリシ所ナリ。コノコロハ、徳川氏ノ勢、ハナハダ、盛ナル時ナリシカバ、諸大名、ミナ、ソノ勢多クノ費用ト勞力トヲヨシマズシテ、建築シタリ。

サレバ、コノ、名高キ城モ、ワヅカニ、一年餘ニシテ、成

堅固
日光

サレバ、コノ、名高キ城モ、ワヅカニ、一年餘ニシテ、成レリトイフ。

コノ城ハ、深キ堀、高キ石垣ヲメグラシテ、堅固ナリ。コトニ、天守閣ハ、堅固ナル石垣ヲタタミシテ、礎トシ、ソノ上ニ、五重ノ閣ヲツクリ置ケリ。鯱ハ、金ヲヌキセタル兩端ニハ、金ヲヌキセタル鯱ヲ置ケリ。鯱ハ、高サ、オヨソ、一丈アリテ、日光、キラキラキラキラシテ、ソノ美シサイハンカタナシ。コノ城ノ名高キハ、ジツニ、コレアルガタメナリ。

コノ天守閣ハ、諸大名ノ中ニテ、コトニ、名高カリシ

多クノ費用ト勞力トヲヲシマズシテ、建築シタリ。

太　美

加藤清正ノ、ソノ一手ニテ、キヅキタルモノニシテ、石材ナドハ、熱田港ヨリ、人夫ヲシテ運バシメタルモノナリ。

サテ、ソノ石材ヲ運ビタル時ノ有様ハ、ジツニ、メヅラシク、ハナバナシキモノニシテ、大ナル石材ヲ、毛氈數十枚ニテ、包ミ、ソノ上ヲ、青色ノ、太キツナニテ、ククリ、サラニ、地車ニノセテ、多クノ人夫ニヒカシメ、美服ヲ着タル兒童ヲ石材ノ上ニノセ、清正ミヅカラハ陣羽織ヲ着片鎌ノ槍ヲツキ立テテ、石材ノ中ホドニ、立チハダカリ、サイハイヲフリナガラ、音

頭ヲトトリタリトイフ。

コノ城ハ、明治維新後、一度ハ、陸軍省ノ所轄トナリシガ、後、ソノ幾部ハ帝室ノモノトナリテ、名古屋離宮ト稱セラル。カノ、名高キ天守閣ハコノ離宮ニ屬セリ。

第十一課　わが陸軍

わが陸軍には、歩兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵などの兵種がある。そのうち、歩兵は、他の兵種にくらべると、人員が、ずっと、多い。

歩兵は、平時、およそ、百數十人づつ、集って、中隊になって

聯隊

をるが、ふつー、これを、三つの小隊に、分ける。また、中隊が、四つ、集って、大隊になり、大隊が、三つ、集って、聯隊になってをる。この聯隊には、大元帥陛下のおわたしになった聯隊旗がある。また、聯隊が、二つ、集って、旅團になり、旅團二つと、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵などがづつとが集って、師團になってをる。

わが國には、師團が、十三、ある。すなはち、近衞師團と、第一から第十二までの、十二の師團とであって、これらの師團には、それぞれ、師團司令部が置いてある。師團司令部は、東京、仙臺、名古屋、大坂、廣島、熊本、金澤、

大坂

所在地

小倉などの要地に、置いてあって、たいてい、昔の城址や聯隊などは、師團司令部の所在地ばかりではなく、諸方にも、配置してある。また、要害な地には、要塞をまうけるか、警備隊を配置するかしてある。また、臺灣には、臺灣守備混成旅團が置いてある。これは、かはるがはる、二三の師團から、いくらかづつの兵を派出したものが集って成り立ってをるのである。

拜啓。入營の當時は、兵營内のよー

大坂
師團司令部は東京、仙臺、名古屋、大坂、廣島、熊本、金澤

も、いっこー、わからず、まことに、こんきゃくいたし候ところ、このごろは、よーすも、あらかた、わかり、少しは、おちつき申候。

兵營内は、われわれの家とはちがひ、萬事に、正しくきまりありて、おくるにも、いぬるにも、食事するにも、すべて、らっぱのあひずにより、おきたると、いぬる前とには、點呼といひ、ちいち、人員をしらべらるることに

銃器

候。また、上下の階級(かいきゅう)はなはだ、正しくて、上官にあひたるときには、ただちに、手をあげて、敬礼すべきことに候。また、それぞれ、一定(いってい)の服装(ふくそう)ありて、おくるよりいぬるまでは、かならず、その、着くべく、寝具(しんぐ)のたたみかた、帽子(ぼうし)のかぶりかたより、ぼたんをみがくことまで、いちいち、注意すべきことに候。ことに、銃器は、軍人のたましひなれば、その手入には、いっそ

教育

姓名

一、注意すべきことに候。

このごろ、兵營内にて、習ひをとり候こ
とは、學科と術科とにて、學科は、上官
の官、姓名、各種類の兵のみわけかた
と、そのつとめと、隊の編制、銃器のく
みたてと、その部分の名稱などに
て、術科は、正しく、立つこと、左、右に向
くこと、正しく、歩むこと、銃の扱方な
どに候。これらは教育なきものには、
ずいぶん、困難なるよーすに候へど

紀律

報知

も、われわれ、小學教育をへたるものには、さまで、困難にはこれなく候。ただ、新兵、いっぱんに、兵營內を、きゅーくつに、感じ候は、前、申し上げ候とほりの、種種の紀律あるがために候。しかし、今は、やうやう、なれて、さほどに感ぜざるよーに、あひ成候。

まづは、近況御報知まで、かくのごとくに御座候。敬具。

十二月十五日

大山鐵三

旗

小泉清君

第十二課　聯隊旗。

わが天皇の、御手づから、
さづけたまへる聯隊旗。
旗のてがらは國のほまれ、
旗のけがれは國のはぢ。
竿のかしらの菊花こそ
わが皇室の御紋なれ。
旗のしるしの朝日こそ
わが帝國の威光なれ。

旗|

長き月日の、その間、
風に、さらされ、雨に、ぬれ、
軍馬の間を往來し、
黒きを旗のひかりとし、
さけしを旗のほまれとし、
ひとたび、えては、千代までも、
萬代までも、つたへゆく
聯隊旗こそたふとけれ。

第十三課　廢物利用。

ある日、おはなの家に、屑屋來りて、紙屑、ぼろ、がらす

校が帝國の威光なれ

のこはれなどを買ひたり。

おはなは、いぶかしげに、この様を見てゐしが、やがて、屑屋（くづや）の立ち去りたる後、母に向ひて、

「屑屋（くづや）は、かのごとき物を買ひて、何にするか」。

と問ひたり。

母はこれに答へて、

「屑屋（くづや）は、かのごとき物を、諸方の家より、買ひ集めて、これを、屑問屋（くづどひや）に、賣るなり。

この屑問屋（くづどひや）にては、これを、その種類によりて、えり分け、紙屑（かみくづ）とぼろとは、製紙場（せいしじょー）に、賣りが、らすの

棄

こはれは、がらす製造場に、賣るなり。

さて、製紙場にては、紙屑とぼろとを

て、紙とし、がらす製造場にては、がら

をつくりかへて、らんぷのほや、びん

これを、世に、賣り出すなり。

紙屑、ぼろ、がらすのこはれなどは、そのままにて

は、もはや、用ひがたき物なれども、かく、つくりか

ふれば、ふたたび、用ひらるべき物となるものな

れば、けっして、棄つることなかれ。紙屑、

ぼろなどは、かならず、屑籠に入れ置き、がらすの

こはれなどは、安全なる所に、集め置くべし」。

と教へたり。

おはなは、また、

「紙屑（かみくづ）、ぼろ、がらすのこはれなどのほかくりかへして、ふたたび、用ひらるべき物となるものありや。」

と問ひたり。

母は、また、これに答へて、

「しかり。なほ、多く、あり。くさりたる酒は、醋（す）に、製するをうべく、貝殻（かひがら）は、焼きて、石灰（いしばひ）に、製するをうべし」。

く、石炭を蒸して、がすを製する時に、出づる、油のごとき、黒き汁よりは、種種の薬品と染料とを製するをうべし。

また、かの灰、ごみなどのごときは、そのままにては、使ひみちなきよーなれども、これも、作物などの、よき肥料となるものなり。

すべて、一度、用にたてたる物にて、そのままにては、もはや、用ひがたき物、または、使ひみちなきよーなる物をば、あるひは、つくりかへ、あるひは、工夫して、ふたたび、用にたつることを廃物利用と

いふ。廢物利用は、人の、よく、心がくべきことなり。」

と教へたり。

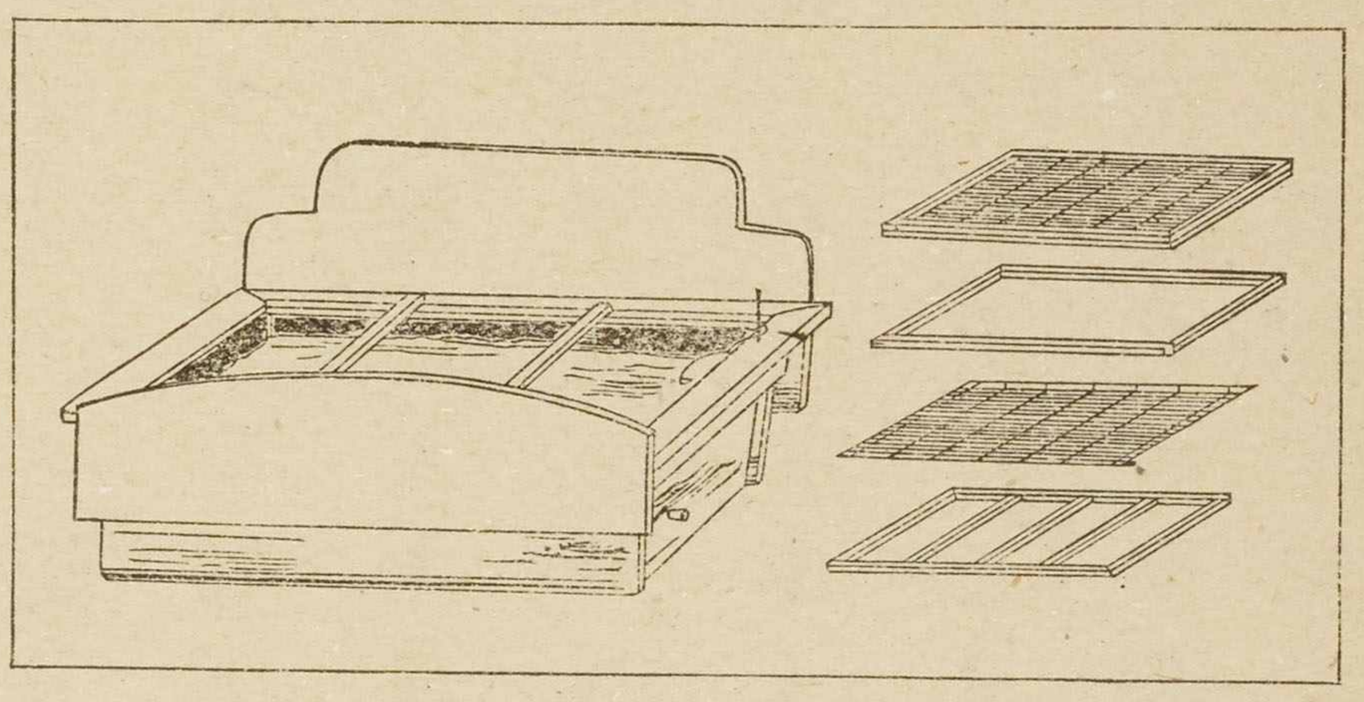
第十四課　製紙。

紙ニハ、日本紙ト西洋紙トアリ。日本紙ハ、楮、ミツマタ、麻、マタハ、ガンピナドノ皮ノ纖維ヨリ、製シ、西洋紙ハ、ボロ、藁、マタハ、木材ノ纖維ナドヨリ、製ス。サレド、日本紙ハ、楮ヨリ、製シタルモノ、モットモ、フツーニ、用ヒラレ、西洋紙ハ、木綿ボロヨリ、製シタルモノ、フツーニ、用ヒラル。

楮ヨリ、日本紙ヲ製スルニハ、秋ヨリ春マデノ間、楮

ノ、イマダ、芽(メ)ヲフカザル時、コレヲカリトリ、二三尺ノ長サニ、切リ、タバネテ、釜(カマ)ニ入レテ、蒸ス。カクテ、ソノ皮ヲハギ、乾カシテ、清キ水ニヒタシ、ソノヤハラカニナリタルトキ、小刀ナドニテ、ソノ皮ノ荒皮ト上皮トヲケヅリ去リ、マタ、乾カシテ、流ニ、サラシ、サラニ、石灰ノ汁、マタハ、灰汁(アク)ヲマゼテ、釜(カマ)ニ入レテ、煮(ニ)ル。カク、煮(ニ)タルモノハ、マタ、ジューブンニ、サラシテ、タタキダイニノセ、棒(ボー)ニテ、タタキテ、綿ノゴトクニ、白ク、コマカキ纖維(センイ)トス。

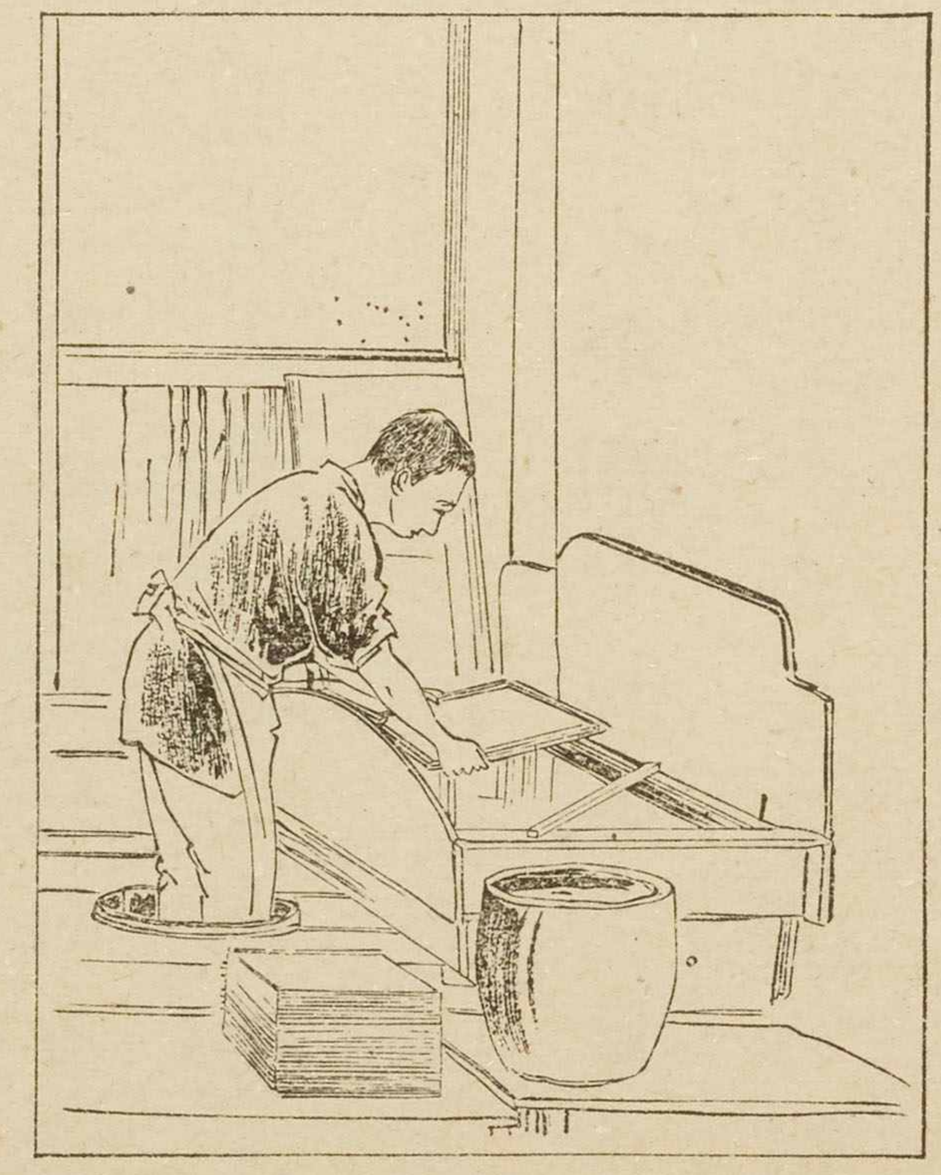
縦
横

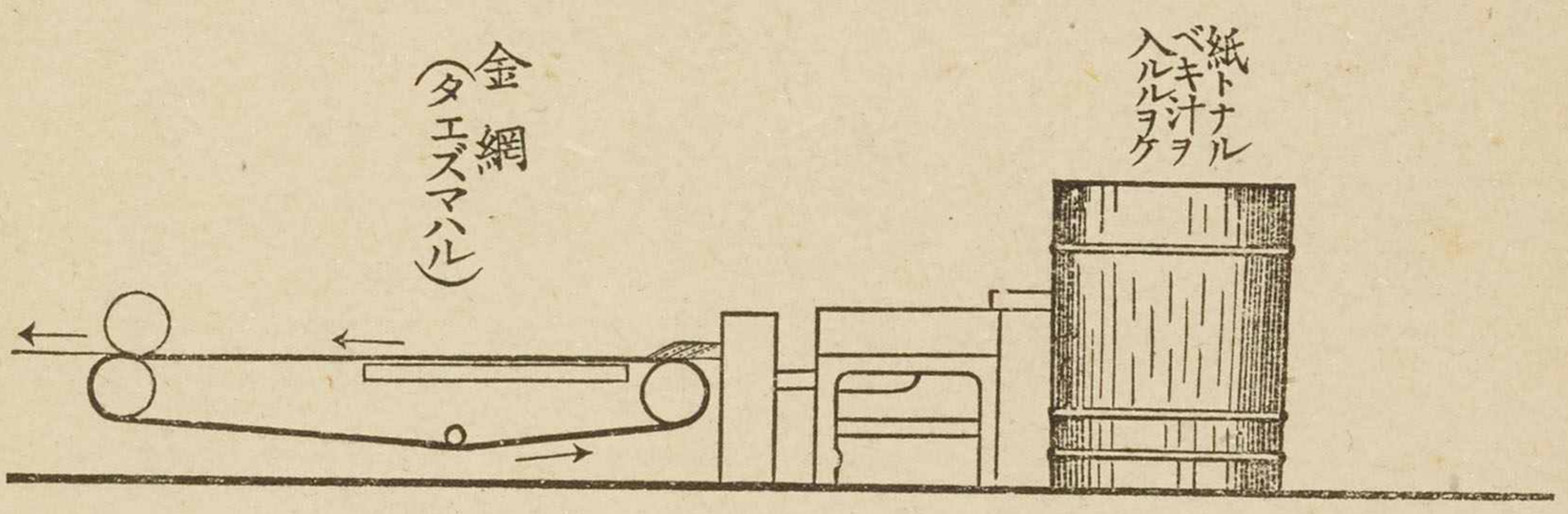


カク、シタルモノハ、コレニ、トロロアフヒノ根ヨリトリタル汁、マタハ、ノリノ木ノ皮ヨリトリタル汁ヲフクマゼ、ヨク、カキマゼテ、漉槽（スキブネ）ニ移シ、ワクニテ、スクヒ、コレヲ幾枚モ重（カサ）ネテ、縦横ニ、ユスリ、上ゲ、水ヲ簀（ス）ニテ、ソノ汁ノ、イチヨリ、タルトキ、簀（ス）ヲ、漉槽（スキブネ）ヨリ、ハナシ、カヘス。カクテ、幾枚モ重（カサ）ネテ、水分ヲシボリ、コレヲ、一枚一枚（イチマイイチマイ）ニ、敷板（シキイタ）ノ上ニ、タラシテ、敷板（シキイタ）ノ上ニ、タラシテ、壓板（オシイタ）ニテ、ジューブンニ、水分ヲシボリ、コレヲ、一枚一

枚ニ、ハナシ、張板（ハリイタ）ニハリ、日ツケテ、ハケニテ、スリワレ光ニアテテ、乾カス。日本ラノ、フツー、用フルヒ紙ハ、カクテ、ハジメテ、製セラルルナリ。

次ニ、木綿ボロヨリ、西洋紙ヲ製スルニハ、マヅ、ボロノ中ヨリ、木綿物バカリヲエリ分ケ、石灰ノ汁ヲマゼテ、圓ク、大イナル釜（カマ）ニ入レテ、蒸ス。カクテ、コレヲ大仕掛（オホジカケ）ノ機械（キカイ）ニカケテ、アルヒハ、コ



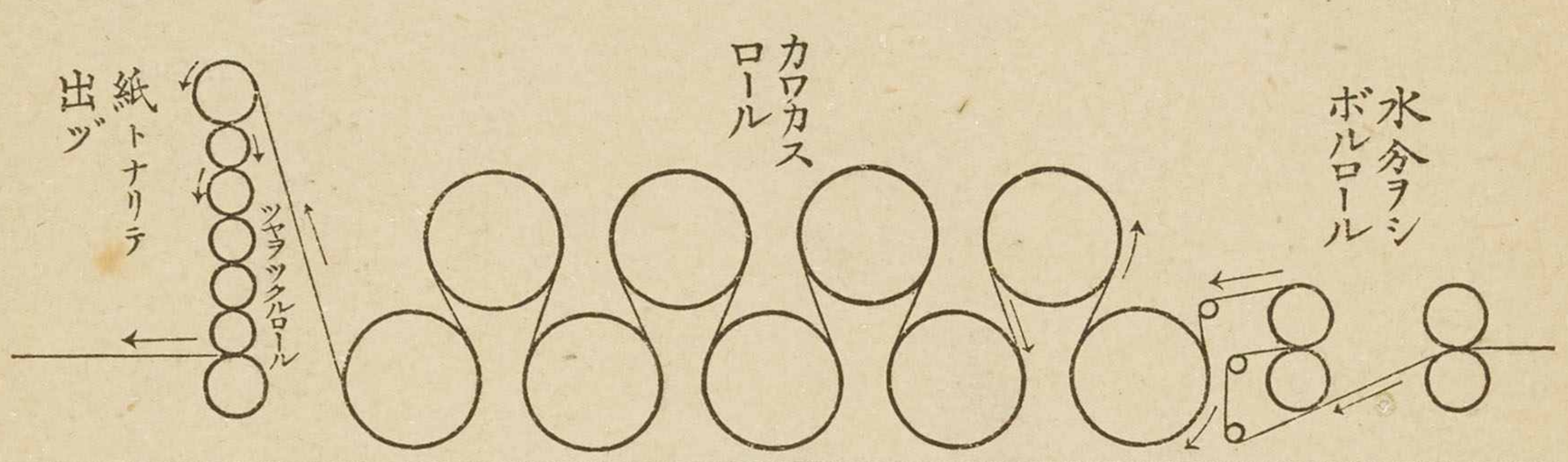


マカク、クダキ、アルヒハ、清ク、サラシテ、カノ日本紙ヲ製スルトキノゴトク、白ク、コマカキ纖維トス。

白キ粘土ナドヲ、ヨキホドニ、マゼ、ヨク、カキマゼテ、マタ、他ノ、大仕掛ノ機械ニ、松脂糊、明礬、カク。

コノ機械ハ、一ツノ金網ト、數十ノローラトヨリ、成レルモノニシテ、金網ハ、曰本紙ヲ製スルトキノゴトク、水ヲ

順序



タラシテ、紙トナルベキモノノミヲ残シ、數十ノロールハ、壓板（オシイタ）、張板（ハリイタ）ナドノゴトク、アルヒハ、コノ水分ヲシボリ、アルヒハ、コレヲ乾カシ、アルヒハ、コレニツヤヲツクク。ワレラノ、フツー、用フル西洋紙ハ、カクテ、ハジメテ、製セラルルナリ」。

日本紙ト西洋紙トハ、コレヲ製スル順序、カク、アヒ、ニタレドモ、一ハ、タイテイ、大（オホ）ヅ手ヲ用ヒ、一ハ、タイテイ、仕掛（シカケ）ノ機械（キカイ）ヲ用フルガユヱニ、ソノ労力ト、製スル

騎餘　價

タカトハ、トーテイ、比較ニナリガタシ。シ洋紙ハ、日本紙ヨリモ、ソノ價、ハナハダ、ヤスクシテ、近來、印刷物ナドニハ、多ク、コレヲ用フルコトトナレリ。

第十五課

源爲朝。

源爲朝は源爲義の子なり。身のたけ、七尺ばかり、ありて、武勇人にすぐれ、ことに、弓の名人なりき。保元の亂おこりたるとき、父に從ひて、崇徳上皇のおんみかたにまゐり、わづかに、二十餘騎を從へて、白河殿の西門を守りたり。

退敵　　矢

ときに、平清盛大軍をひきゐて、この西門にせめよせたり。爲朝、すなはち、人にすぐれたる、強き弓に大いなる矢をつがへて、まっさきに、進み来りしが、めがけて、射はなちたるに、その矢、伊藤六の胸をつらぬきて、次に、進み来りし伊藤五にあたりたり。清盛これを見て、大いに、恐れて、逃げ去りたり。爲朝の兄、源義朝、清盛にかはりて、また、西門にせめよせたり。爲朝「敵將をおびやかして、その軍勢を退けん」と思ひ、義朝めがけて、射はなちたるに、その矢、義朝のかぶとの星をけづり去りて、寶莊嚴院の門

高讀二

矢竹

にあたりて、矢竹の中ほどまでも、とほりたり。このとき、義朝、爲朝に向ひて、「なんぢはるるほどの名人にあらざりけり。今のてだりに、つたなし。」といひたり。爲朝「われ、思ふことありて、わざと、射はづしたるなり。御許あらば、御身のいづこになりとも、射あてん。」といひて、矢をつがへたり。義朝、はなはだ、危しと。義朝のけらい、深巣清國、これを見て、義朝の前に、立ちふさがり、つひあたりて、たふれたり。それより、また、爲朝の矢にあたりて、死ぬるものは、はなはだ、多かりけれ ば、義朝は

ここを去りて、風上より、白河殿に火をかけて、せめ入りたり。

爲朝、今は、「これまでなり。」と思ひ、一方をうちやぶりて、近江の國まで、のがれしが、つひに、とらへられたり。かくて、斬らるべきはずなりけれども、あまりに、めづらしき勇士なれば、ゆるされて、伊豆の大島に、流されたり。

第十六課　一谷の戰。　(一)

保元、平治の亂このかた、久しく、おごりをきはめてをつた平氏も、源頼朝が、伊豆に、おこつて、これにてむかつ

狹　爭

てからは、戰爭するたびに、いつも、やぶられ、つひには、源義仲に京都を攻めたてられて、そのとごとく、西の方へ、逃げのびた。ところが、まもなく、賴朝と義仲との間に、爭がおこって、義仲も、とーとー、戰死してしまったので、平氏は、そのをりにつけこんで、十萬餘人の兵をひきつれて、攝津の國の一谷に、ひきかへした。

この一谷といふ所は、口は狹く、奥は廣く、南には、海をひかへ、北には、けはしい山をせおってゐて、まことに、要害な所である。

防　　攻

平氏（へいし）は、ここに、城をきづいて、用心堅固に、守ってをった。その城の東門から西門まで、三里の間、北、山の麓（ふもと）から、南、海の波うちぎはまでの間、いったいに、人や馬で、ふさがってをった。また、沖にも、いくさ船が、何萬といふほど、ならんでをった。そして、海と陸とは、平氏の赤旗で、ちょーど、一面に、火のもえたつよーであった。

頼朝（よりとも）の弟の範頼（のりより）と義經（よしつね）とは、これを聞いて、さっそく、一谷を攻めた。範頼（のりより）は五萬餘騎をひきつれて、東門に向ひ、義經（よしつね）は二萬餘騎をひきつれて、西門に向った。平氏（へいし）はそれを聞いて、それぞれ、てわけをして、防い

だ。

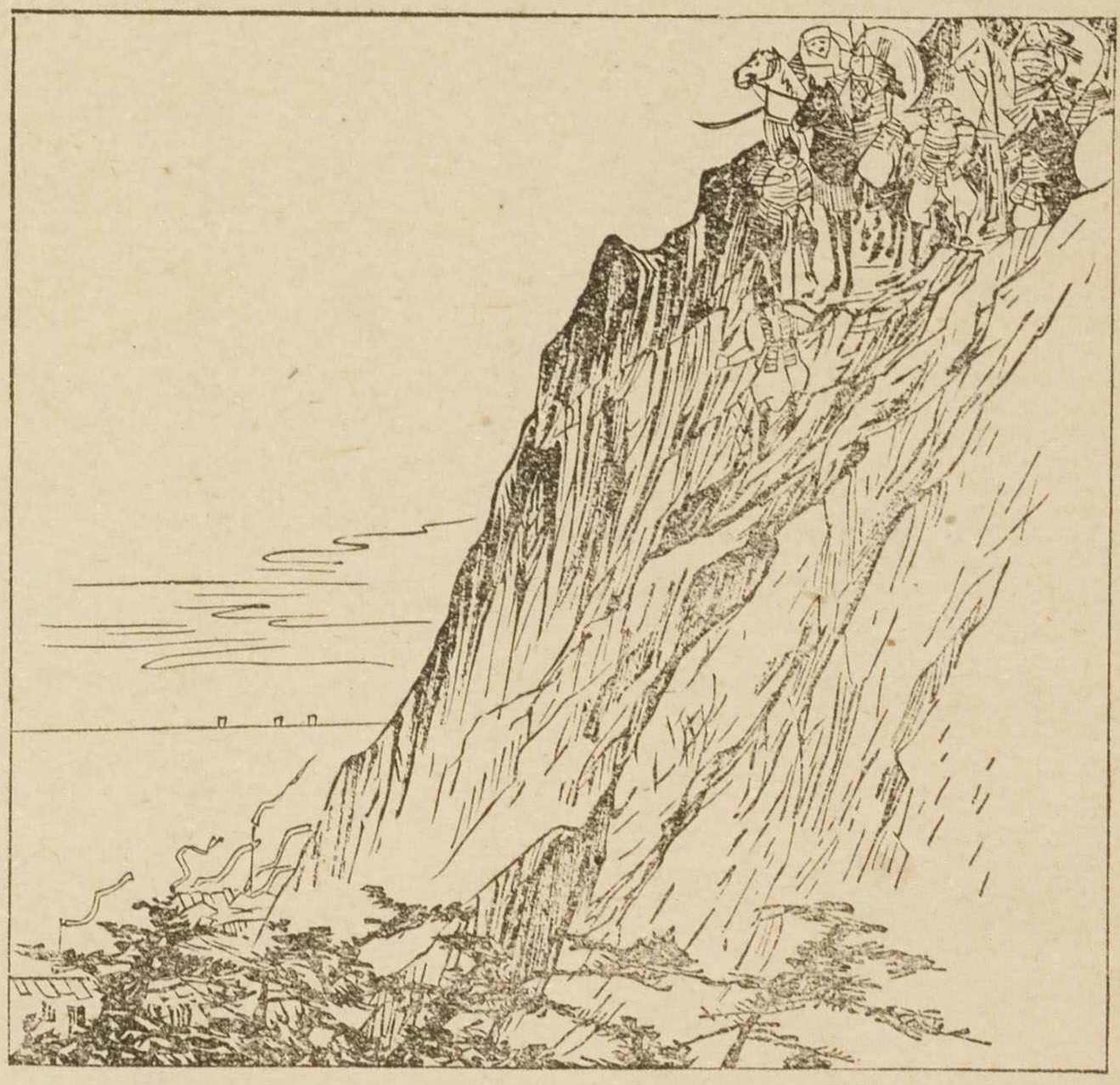
義經(よしつね)は、一度は、西門に向ったが、「間道から、ふいに、敵を攻めよう。」と思って、三千餘騎をえりぬいて、それをひきつれて、鵯越(ひよどりごえ)に向った。鵯越(ひよどりごえ)といふ所は、城の北にあたってをる、名高い難所である。それを、義經(よしつね)は、馬にむちうって、いっさんに、かけのぼった。しかし、けはしい所ばかりで、道はなく、行く先のめあても、しかと、つかんのに、日はくれてしまった。さすがの義經(よしつね)も、しばらくは、とほーにくれてをった。

第十七課　一谷の戰。　(二)

鹿

義經がとほーにくれてをるところへ、けらいが一人の獵師をつれてきた。義經は獵師に向って、「さまざまはこの山の地理を知ってゐるか。」とたづねた。獵師は「くはしく、ぞんじてをります。」と答へた。

そこで、義經は「ここから、一谷の城へ、おりることができるか。」とたづねた。獵師は「とても、できますまい。その城へ、おりる所は、まるで、屏風を立てたやうな、けはしいがけで、ただやすく、おりられる所ではありません。ましてや、馬に乘って、おりることは思ひもよらんことです。」と答へた。義經は「それでも、鹿が通るか。」



とたづねた。獵師(りょーし)は「鹿は通ることもございます。」と答へた。義經(よしつね)はこれを聞いて、「鹿も四足、馬も四足。鹿に通れる所が、馬に通れんことがあるものか。さー。案内せよ。」といって、獵師(りょーし)を先にたてて、夜のうちに、ちょーじょーまで、かけのぼっ

夜は、やうやう、明けわたった。見おろせば、城は何十丈とも知れんがけの下に、あある。東門、西門は、今、戰のまっさいちゅーである。

平氏（へいし）は、「鵯越（ひよどりごえ）の難所から、敵が攻めこまうう」とは、ゆめにも、思はんので、たゞ、東と西とばかりを、いっしょーけんめいに、防いでをる。義經（よしつね）は「ここぞ」。「進め。」と、さしずをしたが、馬も恐れて、たちすくみ、人も、たがひに、顔を見合せて、進むものはない。このとき、義經は「われにならへ」。といひながら、一むちあてて、かけおりた。三千餘騎も、また、つづいて、かけおりた。

討死

そして、息をもつがず、城に攻めてんだ。平氏は、ふいをうたれて、たいそー、うろたへた。義経は、時をはづさず、風上から、城に火をつけた。

平氏は、今は、三方から、敵に攻められて、防ぐことも できず、いよいよ、うろたへて、城をすて、門をすてて、海の方へ、逃げ出した。そして、爭って、舟に乘って、逃げようとしたが、限ある舟に、限ない人馬が乘りこむこともできず、とり殘されて、うたれたものが、おほぜい、あった。平氏の名將の、この海ばたで、討死したものもあった。

舟に乘ったものは、讃岐の屋島に、逃げて行ったが、また、攻められて、長門の壇浦に、逃げ、また、攻められて、とーとー、一族一門、ことごとく、そこの海に、沈んでしまった。

第十八課　アイヌ。

次ノ畫ハ、北海道ニ、住ンデヲルアイヌ、スナハチ、北海道舊土人ヲカイタモノデ、左ノ方ハ男、右ノ方ハ女デアル。

アイヌノ男ハ、髮ヤヒゲヲ、長ク、ノバシテヲッテ、耳ニハ、カネナドノ輪ヲハメ、腰ニハ、マキリトイフ小刀

違



ヲサゲテヲル。マタ、女ハ口ノマハリヤ、手ノ甲(コー)ヤ、腕(ウデ)ナドニ、入墨(イレズミ)ヲシテヲッテ、耳ニハ、ヤッパリ、カネナドノ輪(ワ)ヲハメテヲル。

アイヌノ風俗ハ、コレダケデモ、ワレワレト、ヨホド、違ッテヲルガ、着物ヤ食物ヤ家ナドモ、マタ、タイソー、違ッテヲル。

アイヌハ、男モ、女モ、寒イ時ナドニハ、犬ノ皮ナド

細　袖

デ、コシラヘタ、羽織ノヨーナモノヲ着ルコトモアルガ、ツネニハ、アツシ織デ、コシラヘタ筒袖（ツッソデ）ノ着物ヲ着、足ニハ、アツシ織デ、コシラヘタ脚絆（キャハン）ヲハイテヲル。コノ裾（スソ）ナドニハ、木綿糸デ、イロイロナヌヒトリガシテアル。アツシ織トイフ木ノ皮ヲ、細ク、サイテ、織ッタモノデ、コノアツシ織ヲ織ッタリ、ソレデ、着物ヲコシラヘタリスルノハ、女ノ仕事デアル。

マタ、アイヌハ、オモニ、粟（アハ）、稗（ヒエ）ナドヤ熊（クマ）ヤ鮭（サケ）ヤ鱒（マス）ナドノ肉ヲ食ベテヲッテ、ワレワレノヨーニ、米ヲ食ベル

捕　床　天井　言語

モノハ、ゴク、少イ。コノ粟（アハ）ヤ稗（ヒエ）ナドヲツクリ、熊（クマ）ヤ鮭（サケ）ヤ鱒（マス）ナドヲ捕ルノハ男ノ仕事デアル。

ソレカラ、アイヌハ、ホッタテ小屋ノヨーナ家ニ、住ッテヲルガ、ソノ家ニハ、床モナク、天井モナイ。壁（カベ）ハ藤蔓（フヂヅル）ナドデ、カヤヲククリツケタモノデ、屋根ハカヤヲナラベタモノデアル。

アイヌノ言語ハ、ワレワレノトハ、マルデ、違ッテヲル。マタ、文字トイフヨーナモノガナカッタノデ、讀、書ナドハ、スコシモ、デキズ、數ノカンガヘガ、進ンデヲラナカッタノデ、コミイッタ計算（ケイサン）ナドモデキナカッタガ、明

計算

治十年ゴロカラ、小學校ガデキタノデ、今デハ、ワレワレノヨーニ、讀書モデキ、計算モデキルモノモアルヨーニナッタ。中ニハ、小學校ノ教員ニナッテヲルモノサヘアル。

サテ、アイヌハ、ズット昔ニハ、ズイブン、人數ガ多カッタガ、年年、ヘッテキテ、今デハ、二萬人タラズニナッテヲルカラ、明治三十二年ニ、北海道舊土人保護法トイフ法律ガ出テ、ソレカラハ、農業ヲシタイモノニハ土地ヲヤリ、ビンボーデ困ルモノニハ、農具ヤ種子ナドヲヤリ、病人ニハ、藥代ヲ

保護

ヤリ、マタ、政府ノ費用(ヒヨー)デ、小學校ヲタテテ、ナドガデキルヨーニシテ、イロイロト、アリックク、保護セラレルコトニナッタ。

第十九課　二人の旅人と熊。

あるとき、友だちが、二人づれで、旅行しましたが、ある山路(みち)にさしかかったとき、ふと、熊にであひました。一人は、熊の來るのを、目早く、見つけて、びっくりして、つれのものには、すこしも、かまはず、いそいで、木の上に、逃げ上りました。つれのものは、それより、すこし後に、見つけたの

倒

で、もう、逃げるひまもなく、手に、何も持ってゐません。

のので、防ぐこともできません。

しかし、「熊は死んでゐる人は

かまはんものだ。」といふと

を、かねがね、聞いてゐました

から、路（みち）のまんなかに、倒れて、

死んだもののまねをしてゐ

ました。熊は、だんだん、近づい

て来て、その人の耳や鼻（はな）や胸（むね）

のあたりを、あちこちと、かぎ



まはしましたが、いっこう、生(い)きてゐる様子がありません。

せんので、「いつもの行倒だな。」と思ったものか、べつに、かまひもせずに、いってしまひました。

そのとき、木の上に、上ってゐた友だちが、するすると、おりて來て、

「君は、どんなに、こはかったらう。ぼくは、木の上で、見てゐてさへ、ぶるぶる、ふるへてゐた。しかし、べつに、怪我(けが)もなくて、なによりだった。ときに。君。熊が、君の耳に口をよせて、何だか、話したよーだったが、あれはどんなことをいったのだ。話して聞かせたま

（。」

といひました。倒れて

らへて、

「なに。べつのことでもなかった。ただ、『危いしさをこ

ぶんの身ばかりかばって、ひとの身の上を思はん

よーなものとは、以後、つきあはんよーにせよ。』と

いったばかりだ。」

といひました。

第二十課　笠置落。

笠置の山の行在所、

仕歩

また、賊兵におそはれて、
行くへも知らず、落ちたまふ。
君のおともに仕へしは、
藤房、季房、ただ、二人。
夜、晝、三日、食もなく、
歩み疲れて、松かげに、
ふさせたまふぞ痛はしき。
君は、御袖にふりかかる
露うちはらひ、さして行く
笠置の山を出でしより、

天(あめ)が下には、かくれがもなし。」と歌はせたまひしに、藤房(ふさ)、やがて、「いかにせん、頼むかげとて、たちよれば、なほ、袖ぬらす松の下露(したつゆ)。」と御返歌(ごへんか)申し、泣きそめたる、やみの天地を、また、もとの御代にかつすはたが任ぞ。金剛山(こんごうせん)下に、忠士あり。

をはり。

明治三十七年二月三日印刷
明治三十七年二月七日發行
明治三十九年七月一日翻刻印刷
明治三十九年七月十五日翻刻發行

著作權所有

明治三十九年七月九日
文部省檢查濟

高等小學讀本 二
定價金七錢五厘

著作兼發行者 文部省
翻刻發行者 大橋新太郎 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者 愛敬世利 東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百。八番地
發行所 博文館 東京市日本橋區本町三丁目八番地

發賣所 東京市日本橋區新右衞門町十六番地 株式會社 國定教科書共同販賣所

72429

国立国語研究所
1000605459

. 0
24